丹比真人、柿本朝臣人麻呂の心をあてはかりて、報ふる歌一首

二二六番

荒波に　寄り来る玉を　枕に置き　我ここにありと　誰か告げけむ

或本の歌に曰く

二二七番

天ざかる　鄙の荒野に　君を置きて　思ひつつあれば　生けるともなし

和銅四年、歳次辛亥、河辺宮人、姫島の松原に娘子の屍を見て、悲嘆しびて作る歌二首

二二八番

妹が名は　千代に流れむ　姫島の　小松がうれに苔生すまでに

二二九番

難波潟　潮干なありそね　沈みにし　妹が姿を見まく苦しも